慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	他者の性格特徴に関する情報獲得過程
Sub Title	0 n the process of acquisition of information about the features of others' personality
Author	佐藤, 一美(Sato, Hitomi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1974
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.14 (1974.) ,p.69- 79
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000014-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他者の性格特徴に関する情報獲得過程*

On the Process of Acquisition of Information
about
the Features of Others' Personality

佐　藤　一　美**
Hitomi Satow

序

「人間は社会的動物である」とは，ギリシャの高名な哲学者の言葉であるが，彼の言うように我々人間がこの社会で生活していく限り，他者との相互作用なしに生きてはいけない。この他者と掛かり合う際，その人の性格・態度等の属性を知覚することは，社会的行動を遂行していく上で，最初の経験であるとともに，非常に重要な事柄である。このことを社会心理学では，対人知覚(person perception)と呼び，今日では重要な研究分野の一つとなっている。

しかし，この分野の研究が活発に行われるようになったのは，そう古くからではなく，1950年代に入ってからのことであり，その嚆矢となったのがAsch (1946)のパーソナリティの印象形成に関する実験であったと，筆者は記憶する。その後の研究動向は，Tagiuri & Petrullo (1958)，大橋 (1960)，長田 (1966)，Tagiuri (1969) 等の概観に詳しいが，刺激として形容詞語から写真・筆蹟・録音された声・実際の人物等が用いられ，刺激の範囲が広められてはいるが，殆んどの研究が一時点での知覚を問題にしているに過ぎない。一般に，他者の性格特徴の知覚は，一目見た瞬間に成立することもあるかもしれないが，多くの場合，何度か会ううちにその人がどういう性格の人であるかということが，次第に分ってくるものではないだろうか。この問題をこのような観点から検討したものは，筆者の知る限り，Newcomb (1961)，笹尾 (1969) 等の研究以外，殆ど見当らないのが現状である。

ここで，本実験の礎石である笹尾の研究の主要な結果を簡単に紹介する。笹尾は，「他人の性格特性の認知」についての情報の獲得がいかなる過程を経るかを検討するために，5回の面接経験（面接者・被面接者はこの面接回数を事前に知らされていた）を通して，5人の面接者に対し，それまで面識のない10人の被面接者に会わせた後，性格特徴の評定をさせた。その結果 1) 獲得する全情報量の変化は，たちあがりの速い曲線を描いており，一定の型がみられた (Fig. 1)。2) 最終評定と一致する情報量の変化は，直線を描いている (Fig. 2)。という結果を得た。

そこで本研究はこれを更に吟味するために，人間の情報獲得過程研究の一環として，面接経験の増加に伴なう「他者の性格特徴」に関する情報が，いかなる過程を経て獲得されていくかを二つの実験から考究する。

実　験 I

目　的　面接場面における他者の性格特徴に関する情報獲得過程を検討する。

資料収集の方法

1) 資料収集のための材料　。「精研式第一印象評価用紙」の質問項目(60項目)。擬装のための質問項目——

---

* 本論文は筆者の修士論文（佐藤，1973 a）に基づくものであり，その一部は日本心理学会第 37 回大会において報告した（佐藤，1973 b）

** 御指導賜わりました印東太郎教授に記して謝意を表します。
また，実験 I，II を通して被験者を快諾された諸学兄に感謝します。

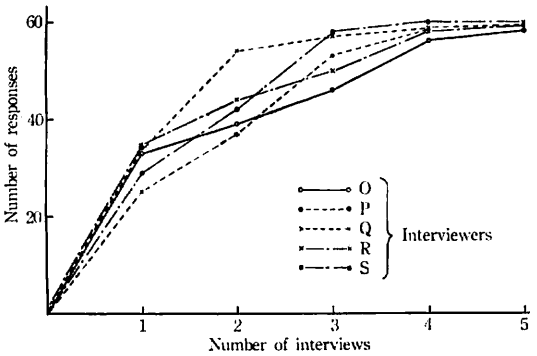

Fig. 1　The amount of information acquired through each interview: The average of each interviewer.
(Sasao, T. 1969)

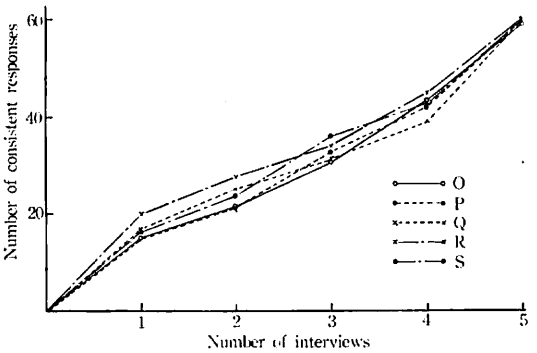

Fig. 2　The change of the amount of informations consistent with the one retained at the close of last interview
(Sasao, T. 1968)

繰返による効果を防ぐために「精研式第一印象評価用紙」の質問項目と内容の類似したもの（30 項目）。各質問項目は，呈示順序の効果による影響を避けるために，1 項目が 1 枚のカードに印刷されている。カードの大きさは 7 cm×13 cm である。◦回答用紙

2)　実験の時期　昭和 47 年 10 月～12 月

一週間隔で 7 回にわたり実施。但し，被験者は面接回数を事前に知らされていない。

3)　被験者　◦面接者（評定者）—心理学専攻の男子大学院生 4 名　◦被面接者（被評定者）—男子大学生 3 名。なお，面接者と被面接者は本実験が行なわれるまでお互に全く面識のない者が選ばれた。

4)　手　続　実験者は被験者（面接者・被面接者）全員に対して次の教示を与える。「あなた方大学生が，現在どのような考え方をし，どのような日常生活を過しているのか，つまり大学生の生活意識を知りたいと思いますので，大学生の生活についてというテーマで，これから数回（たかだか 10 回前後）にわたり自由に話し合っていきたいと思います」。そして面接者には，別に，次のような上記以外の教示を事前に与えておく。「これから初対面の人と一緒に討論に参加してもらいます。そして各討論終了後に，その人がどういうパーソナリティの人であるかを評定してもらいます。この実験の実施にあたり次の事に注意してください。①討論場面中，後でパーソナリティの評定をすることを，被面接者に気づかれないこと。（実験期間中，被面接者は自分が評定されている事を知らされていない。）②面接者は，後でパーソナリティの評定をするために参考になるようなことを，討論場面で話題になっている事柄の中から質問してもよい。しかし，質問項目の内容そのものずばり——"あなたは神経質ですか"というようなことは聞かないこと。③被面接者に対して集中的に質問しないこと」即ち，討論のメンバー全員にまんべんなく質問する。

このようにして，面接者は実験当初，初対面であった被面接者と 7 回の討論過程（以下面接 1～7 と呼ぶ）を経て知合っていく。

5)　性格特徴の評定　評定は，各面接終了後，面接者だけ集めて行われる。実験者は，呈示順序による評定の歪みを避けるために，質問項目カードを事前に shuffle して与える。各面接者は，討論場面での被面接者の言動に基づき，質問項目カードの呈示順序に沿って被面接者の性格特徴を 5 段階評定尺度（Fig. 3）で評定を行う。またその評定に際し，どの程度の自信をもって行ったかを知るために，自信値の程度を評定尺度（Fig. 4）で記入してもらう。もし質問項目に対して回答できない時，評定尺度になにも記入せず，自信値の記入欄に「0」を記入し次の質問項目へと進む。

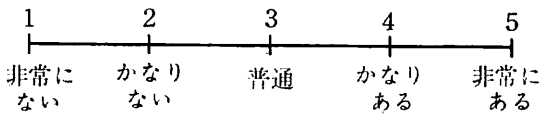

Fig. 3　Five points scale in rating the pesonality features

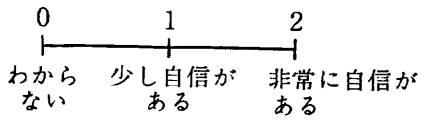

Fig. 4　Three points scale in rating self-confidence

6)　各面接終了後，面接者に被面接者のパーソナリティを自由に記述してもらう。すなわち，ここでは，被面接者のパーソナリティをずばり一言で表現してもらう。

結　果

1.　資料整理の方針　本実験における情報獲得過程の検討では，次の2つのレベルを取上げる。①質問項目に対する回答レベルにおける情報獲得過程。②パーソナリティの内容[1] レベルにおける評価値の変化。そこで，①における情報量の指標としては，面接者が質問項目に回答することのできた回答数を用いる。②においては，評定尺度の数値（1～5）を「-2～0～+2」に変換し，それにパーソナリティの内容別の対応する回答数を乗じた積を評価値[2] とする。また，①に関する情報量は，「面接者」と「被面接者」の二つの側面から見ることができる。これをそれぞれ「面接者別情報量」，「被面接者別情報量」と呼ぶことにする。

2.　主要な結果

1)　質問項目に対する回答レベルの情報獲得過程。

面接経験の増加に伴ない，被面接者の性格特徴に関する情報は，いかなる過程を経て獲得されていくのであろうか。以下，これを〔面接者〕・〔被面接者〕の二つの側面から分析していくことにする。

(1)　面接者別の性格特徴に関する情報獲得過程の分析。

各面接終了時に，面接者が被面接者の性格特徴に関する評定で，全60項目のうち自信値1以上で回答した項目数を，その時点での全情報量とし，それを面接者[3] A～D別の平均で示したものが Fig. 5 である。また自信値2で回答した項目数を同様に纏めたものが Fig. 6 である。これらから次の事が言える。

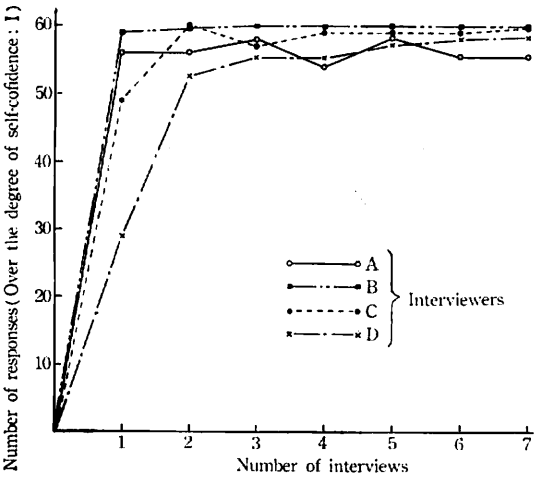

Fig. 5　The amount of informations acquired through each interview: (Over the degree of self-confidence: I): The average of each interviewer.

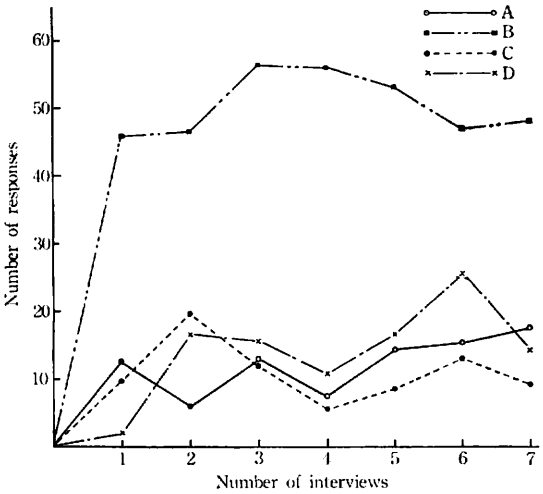

Fig. 6　The amount of informations acquired through each interview (The degree of self-confidence: II): The average of each interviewer.

①情報の獲得を示す曲線は，非常にたちあがりの速い concave-downward 型である。　②この曲線は，面接者により固有のパターンがある。即ち，面接1で既に殆んどの情報を獲得する人（B），面接経験の増加に伴ない除々に情報を獲得していく人（D），面接経験の増加に伴ない情報の獲得で増減のある変動を示す人（A）がいる。③更に，各面接者が個々の被面接者に関する情報を，どのようなパターンで獲得していったかということを検討すると，面接者 B・C は被面接者 r～t に対して同じような曲線パターンで情報を獲得している。面接者Dは r, t の情報を類似したパターンで獲得しているのに対して，s の情報獲得が遅い。面接者 Aは，r, t に対して同じパターンで情報を獲得していくが，sに対する情報獲得量は面接経験が増加しても増減のある変動を示している。

④自信値2で評定した項目数は，面接者 A・C・D にとり面接経験が増加するのに応じて約12項目位で増減を示している。これに対して面接者 Bは，他の3人と項目数のレベルはかなり異なるが，やはり約50項目で増減のある横這を示している。

(2)　被面接者別の性格特徴に関する情報獲得過程の分析。

面接者別に情報獲得過程の分析を行った結果，何人か

の面接者にとり特定の被面接者の情報が獲得されにくい事が認められた〔(1)—③〕。従ってこの現象を更に明確に把握するために，被面接者の側面から検討を加える。Fig. 7 は，各面接終了時に保持している面接者の全情報量を被面接者 r～t ごとに纏め，それを平均値で表示したものである。また Fig. 8 は，全情報量の中で自信値 2 で評定したものだけを被面接者ごとに纏め，その平均値で表示したものである。これらから次の事が言える。

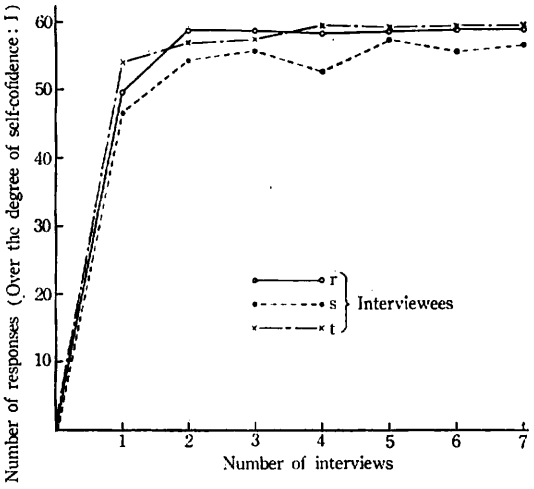

Fig. 7　The amount of informations acquired through each interview: (Over the degree of self-confidence: I): The average of each interviewee.

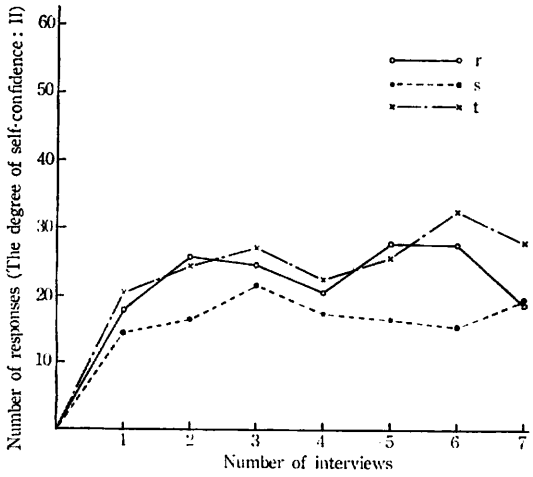

Fig. 8　The amount of informations acquired through each interview (The degree of self-confidence: II): The average of each interviewee.

①全情報量を示す曲線は，平均値の上でほぼ類似したパターンを示しており，面接者にとって特に情報の獲得しにくい被面接者は認められないが，やや s の情報が獲得しにくいと言える。

②更に s を細かく分析すると，既に〔(1)—③〕に述べたように，面接者 A・D にとって獲得しにくい事が分った。

③同一の被面接者に対して同じようなパターンを示すといっても，面接者により情報獲得速度及びパターンは異なる。

④自信値 2 で獲得した情報量を示す曲線は，面接経験の増加にも拘らず約20項目位で横這状態を示している。またその曲線パターンは，r～t でほぼ類似しているが，s のレベルが低い。

(3)　性格特徴に関する最終評価[4] 形成過程の分析 1。

これまで情報の獲得過程に関して，質問項目に対する面接者の回答数の変化という量的側面から分析を加えてきたが，ここでは被面接者に対する面接者の最終評価がいつ頃形成されたかという事を検討する。Fig. 9 は，各面接終了時に保持している情報のうち，最終面接時に保持している情報と評定値の一致する項目総数の変化を，「面接者別の平均値」で表示したものである。また Fig. 10 は，「被面接者別の平均値」で表示したものである。これらから次の事がいえる。

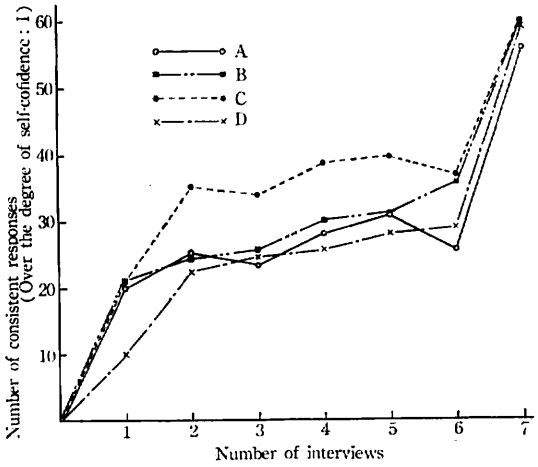

Fig. 9　The change of the amount of informations consistent with the one retained at the close of each interview (Over the degree of self-cofidence: I): The average of each interviewer.

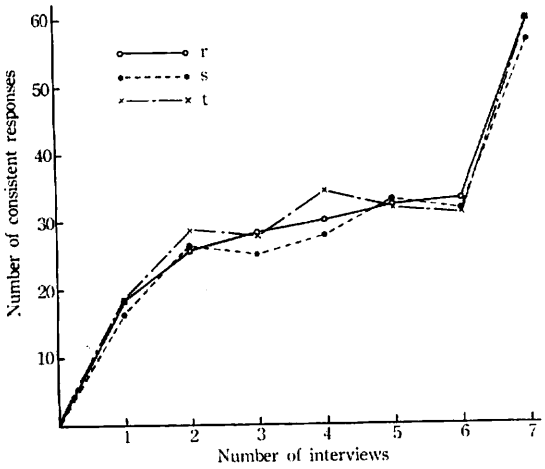

Fig. 10 The change of the amount of informations consistent with the one retained at the close of each interview (Over the degree of self-confidence: I). The average of each interviewee.

①最終面接終了時の情報と一致する情報の量を示す曲線は，学習曲線でいう「消極的一積極的加速度曲線」に類似したパターンを示しており，笹尾の「直線」(Fig. 2) とは異なっている。

②面接者 A～D 間の曲線パターンは類似しているが，C のレベルがやや高い。

③同一面接者内においても，被面接者が異なれば曲線のパターンもまた多少異なる。

④「被面接者別の平均値」で，最終評価と一致する情報量を示した曲線は，r～t で殆んど同じパターンを示している。

⑤しかし，被面接者 r～t を個々に検討した場合，s に関する一致した情報量は，面接者 A・B・D に比べて C のレベルが高い。

(4) 性格特徴に関する最終評価形成過程の分析 II。

筆者は(3)で，被面接者に対する面接者の最終評価の形成される時期を検討した。しかし，その曲線パターンは，笹尾のとはかなり異なる様相を示した。この相違の原因が全情報量のレベル差にあると考え，ここでは「全情報量」の中で「最終評価と一致する情報量」の占める比率「R」を求め，面接経験の増加に伴なうその変化を検討する。

$$R = B/A$$

A：各面接で獲得した全情報量。

B：各面接で獲得した全情報量の中で，最終面接終了時に保持している情報と評定尺度値の一致する情報量。

Fig. 11 は，面接経験の増加に伴なう「R」の変化を，面接者別の平均値で表示したものである。Fig. 12 は，この「R」を，被面接者別の平均値で表示したものである。また Fig. 13 は，笹尾の資料をもとに筆者が「R」を算出し，表示したものである。これらの結果から次の事が言える。

①面接者別に R を表示した曲線は，本実験及び笹尾

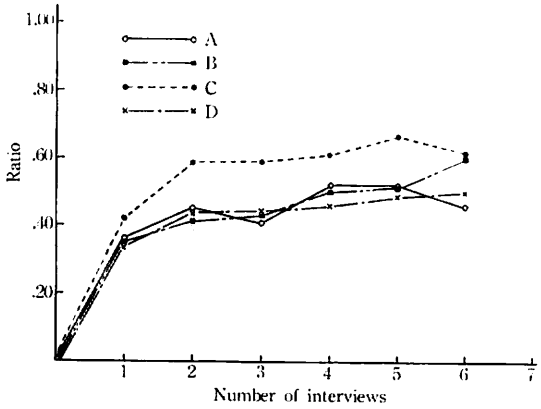

Fig. 11 The change of the ratio of informations consistent with the last out of informations retained at the close of each interview (Over the degree of self-confidence: I.): The average of each interviewer.

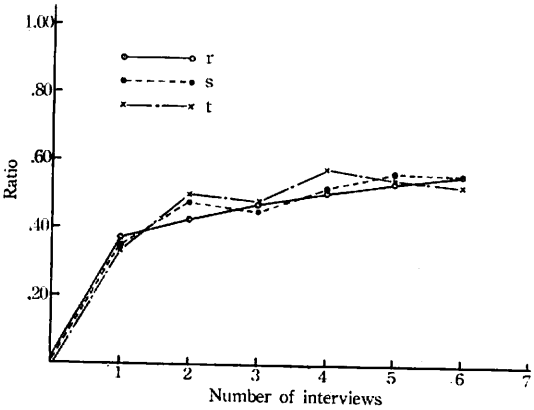

Fig. 12 The change of the ratio of informations consistent with the last out of informations retained at the close of each interview (Over the degree of self-confidence: I): The average of each interviewee.

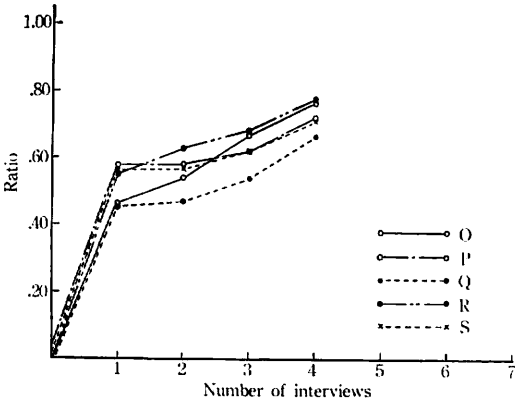

Fig. 13 The change of the ratio of informations consistent with the last of informations retained at the close of each interview: The average of each interviewer [Computed from Sasao, T, (1969) by Satow, H.]

とも concave-downward 型[5] を示している。しかし，本実験よりも笹尾の方がややたちあがりが速いといえる。

②本実験の場合，面接者Cの「R」は，他の3人に比べてレベルがやや高い。また，同一面接者内では，類似した曲線パターンを示しているが，被面接が異なれば，そのパターンも多少異なる。

③笹尾の場合，面接者の曲線パターンを個々に検討すると，面接者0は「直線型」に近いが，他の P～S は「concave-downward 型」を示している。

④本実験の場合，被面接者別に「R」を見た場合，その曲線パターンは r～t 間で殆んど類似している。

(5) 被面接者の性格特徴に対する固定的評価。

(3) と (4) で，最終評定と一致する情報量の変化を検討してきた。しかしそこでは，ある項目の評定値が面接1で一致したからといって，その後ずっと一致するかどうかは分らない。従ってここでは，面接1～7を通して，評定値の固定している項目の有無を検討する。この結果，次の事が認められた。

①評価の固定している項目数は，被面接者1人につき，面接者4人を合せても10～14項目と非常に少い。

②同一被面接者に関する評価の固定した項目は，面接者によりかなり異なり，共通性は認められない。

③評価の固定している項目をパーソナリティの内容別に纒めると，「D」—11項目，「Z」—9項目と多く，これに対し「E」—1項目，「N」—3項目と少い。即ち，パーソナリティの内容により，固定評価項目の多いものと少いものがある。

2) 「パーソナリティの内容」レベルにおける評価値の変化。

既に筆者は 1) で，「他者の性格特徴に関する情報の獲得過程」を，面接者の回答数という量的な指標を用いて検討してきた。しかしそこでは，回答に含まれている評定尺度値を度外視したために，被面接者に対する面接者の性格特徴の評価がどのように変化したのか分析できなかった。従ってここでは，その評定尺度値をもとにして，パーソナリティの内容別の評価値の変化を検討する。面接経験の増加に伴なう評価値の変化は，面接者4人，被面接者3人で4×3種あるが，このうち特に典型的なものを，Fig. 14 に表示した。このことから次の事が認められた。

①面接者別に，評価値の変化を示す曲線パターンの様相を見た場合，面接者により固有のパターンがある。即ち，面接者A・Bは，その曲線パターンがかなり明確に分化しているのに対し，Cのはあまり分化していない。

②同一被面接者に関する評価は，必ずしも面接者間で一致しているとは言えない。

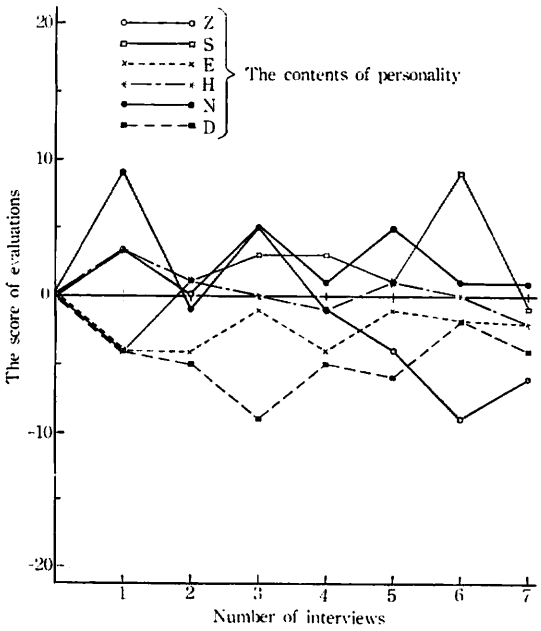

Fig. 14 A The change of evaluations caused by the increase of experience of interviews.
Interviewer: A, Interviewee: s

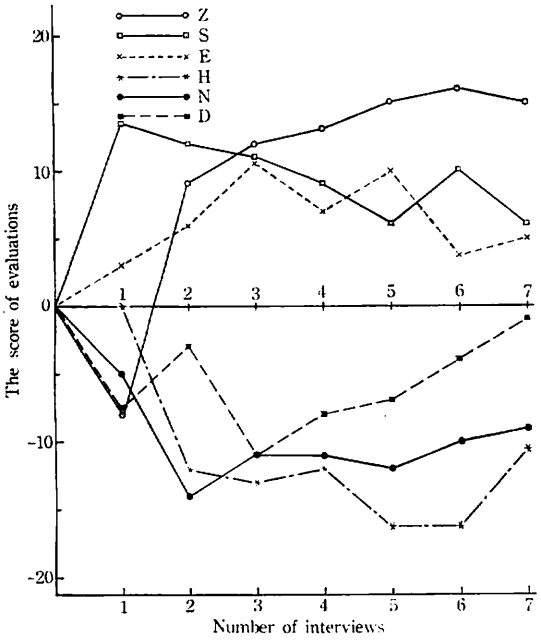

Fig. 14 B　The change of evaluations caused by the increase of experience of interviews.
Interviewer: B, Interviewee: r

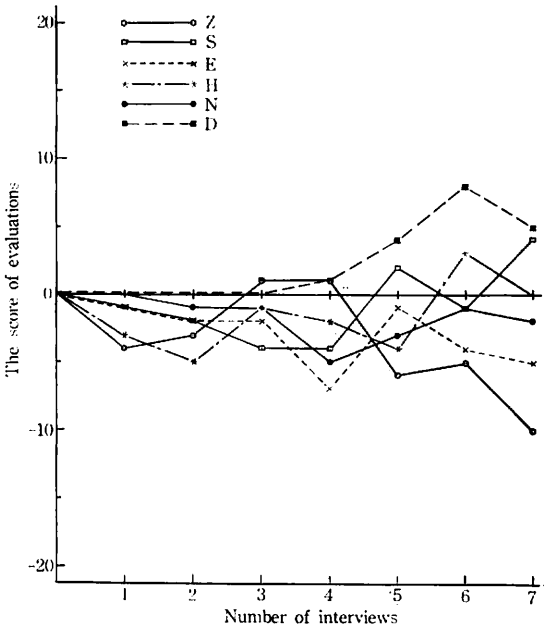

Fig. 14 D　The change of evaluations caused by the increase of experience of interviews.
Interviewer: D, Interviewee: s

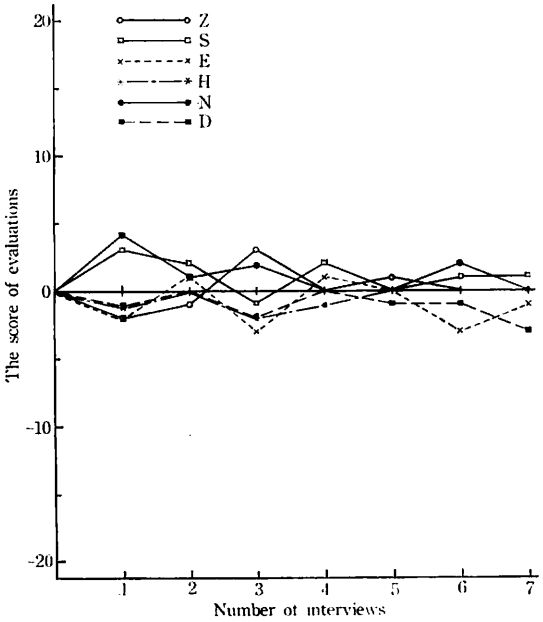

Fig. 14 C　The change of evaluations caused by the increase of experience of interviews.
Inerviewer: C, Interviewee: s

実　験 II

目的　自然な形で知合いになった人物の性格特徴に関する情報がいかなる過程を経て獲得されたかという事を検討する。

資料収集の方法

1)　資料収集のための材料　◦「精研式第一印象評価用紙」の60項目 (No. 1～60)。
◦回答用紙。◦カード・ボード。

2)　実験の時期　昭和 47 年 11 月～12 月。

3)　実験場所　慶応義塾大学三田心理学実験室 (B 112)。

4)　被験者（評定者）　実験 I の面接者 4 名を含む心

a. 最初(初対面)から現在までずっと変らずに感じている性格特徴	b. 最初は感じていなかったが、交際するにつれて途中から感じるようになった性格特徴
c. 最初から現在までずっと感じていない性格特徴	d. 最初は感じていたが、交際するにつれて途中から感じなくなった性格特徴

Fig. 15　A card board for sorting categories.

理学専攻の教授・男女大学院生・大学生の計 16 名。

5) 手続　被験者の前にカード・ボード (Fig. 15 に呈示) と shuffle された質問項目を置き，次のような教示を与える。「これからあなたに，同性の親しい友人―幼な友達を除いて，その人と初めて会った時期のいえる人に限ります―を5人思い出してもらいます。ここに性格特徴を記述したカードがありますから，このカードを，その各々の友人と交際するにつれて感じるようになったパーソナリティの印象によって，カード・ボード上の4つのカテゴリーに分類してください。」そして，各カテゴリー別に回答用紙に記入してもらう。その際，各質問項目を分類した時，どの程度の自信をもって判断したかを，実験Ⅰと同様に記入してもらう。

結　果

1) 資料の整理方針　実験Ⅱでは次の2つの側面から「情報の獲得過程」を検討する。

①4つのカテゴリーに分類された質問項目の頻数をパーソナリティの内容別に表示し，これを検討する。

②実験Ⅱと実験Ⅰの結果を比較検討するために，実験Ⅰの資料をもとに，面接経験の増加に伴なう質問項目に対する評定尺度値の変化を手掛にしてカテゴリーに分類し，これをパーソナリティの内容別に表示し検討する。

2) 主要な結果

Fig. 16 は，「自然な形で知合いになった人物」の性格特徴に関する情報の獲得過程をパーソナリティの内容別に示したものである。また Fig. 17 は，実験Ⅰの結果をもとにして5つのカテゴリーに分類した。即ち，「面接1～7を通して，評定尺度値が4～5の質問項目」→カテゴリーa。「面接1で評定尺度値が1～3であったものが，面接2以降4～5になった質問項目」→カテゴリーb。「面接1～7を通して，評定尺度値が1～3の質問項目」→カテゴリーc。「面接1で評定尺度値が4～5であったものが，面接2以降，評定尺度値が1～3になった質問項目」→カテゴリーd。そして新たに，「面接1で評定尺度値が4～5（または1～3）であったものが，面接2～6で1～3（または4～5）になり，面接7で元の4～5（または1～3）になった質問項目」→カテゴリーe。

①「自然な形で知合った人」及び「実験Ⅰの被面接者」の性格特徴に関する情報の獲得される時期は，パーソナリティの内容によってそれぞれ異なる。

②「カテゴリーa：最初からずっと感じている性格特

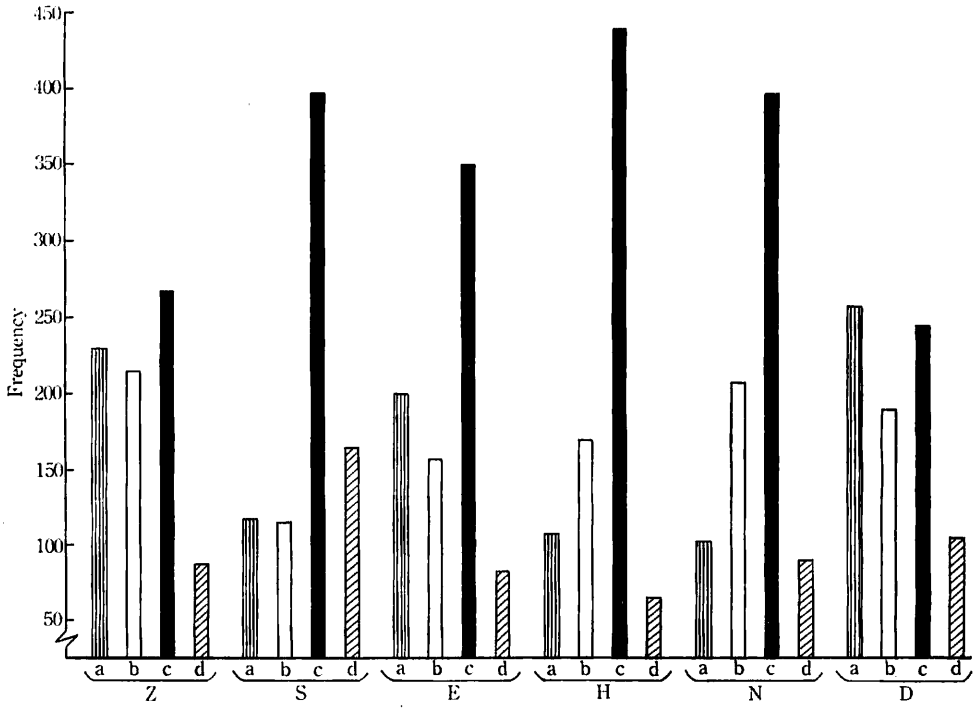

Fig. 16 The acquisition process of informations classified by the contents of personality
——about the personality features of the persons formed a natural acquaintance.

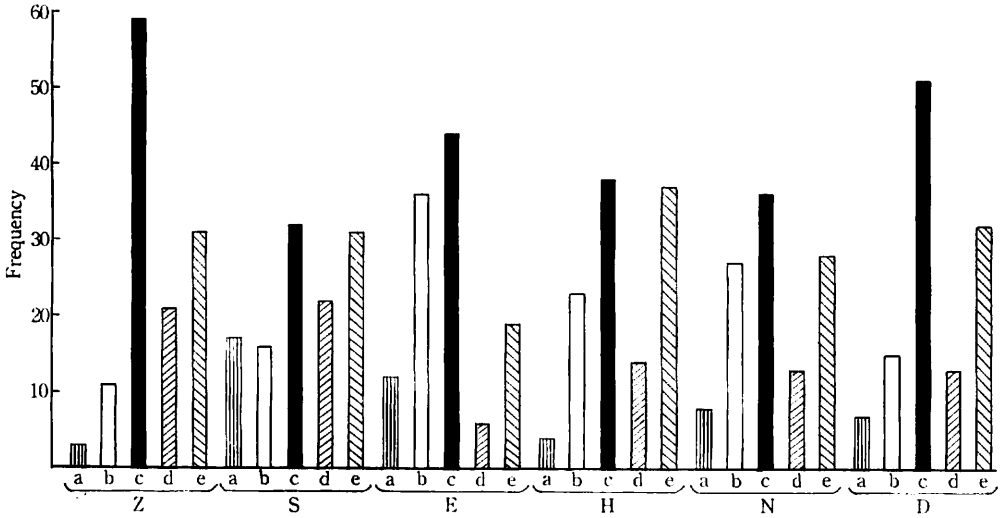

Fig. 17 The acquisition process of informations classified by the contents of personality
——about the personality features of the persons under experiment I.

徴」に分類された質問項目は，「自然な形で知合った人」の場合，Z・D・E に属するものが多いのに対して，「実験Ⅰの被面接者」の場合，このカテゴリーに含まれる質問項目は比較的少い。

③「カテゴリーb：途中から感ずるようになった性格特徴」に分類された質問項目は，「自然な形で知合った人」の場合，Z・N・D・H・Eに属するものが多く，「実験Ⅰの被面接者」の場合，E・N・Hに属するものが多い。

④「カテゴリーc：最初から感じていない性格特徴」に分類された質問項目は，「自然な形で知合った人」及び「実験Ⅰの被面接者」とも，パーソナリティの内容に関係なく非常に多い。

⑤「カテゴリーd：最初は感じていたが，途中から感じなくなった性格特徴」に分類された質問項目は，「自然な形で知合った人」の場合，Sに属するものが多く，「実験Ⅰの被面接者」の場合，S・Zに属するものが多い。

⑥「カテゴリーe：最初感じていたものが途中で感じなくなり，最後にまた感じるようになった性格特徴。または，この逆であったもの」に分類された質問項目は，「自然な形で知合った人」の場合，パーソナリティの内容に関係なく多い。

総合考察と結論

本稿は，他者の性格特徴に関する人間の情報獲得過程を，実験Ⅰ・Ⅱを通して様々な角度から検討したが，結論として次の事が導かれた。

1)　他者の性格特徴に関する情報獲得過程。

笹尾(1969)のように，面接者に面接回数をあらかじめ知らせた場合，最終面接終了時までに60項目すべてに回答できるように，面接回数にうまく割振りながら，情報を獲得していく。これに対して本実験のように，面接者に面接回数を知らせない場合，初対面の時に殆んどの情報を獲得してしまう。つまり，本実験のように，面接者にとって面接回数がさだかでない場合，なるべく早い時期に情報を獲得しようという心的機制が働くのではないかという事が示唆された。

2)　他者の性格特徴に関する最終評価形成過程の分析Ⅰ——質問項目レベル

各面接で獲得した情報のうち，最終面接終了時に保持している情報と評定尺度値の一致する情報量（項目数）は，笹尾(1966)の場合，面接1で約15項目，その後「直線的な型」で増加していく。これに対して本実験の場合，面接1で約17項目，その後，学習曲線でいう「消極的——積極的加速度曲線に類似した型」で増加していく。従って，このことから最終評価の約30%近くが初対面で形成されるといえる。また面接2以後の曲線パターンが両実験結果で異っているが，「全情報量」の中で「最終評価と一致する情報量」の占める比率「R」を求めた結果，両者とも「concave-downward 型の曲線」を示したので，この相違は，反応数によるものとを考えられる。

3) 他者の性格特徴に関する最終評価形成過程の分析 II——パーソナリティの内容レベル

2) の分析で「第一印象」の効果がある程度示唆された。しかしこの分析法では，たとえある項目の評定尺度値が面接1と最終評価とで一致したからといって，それが面接2で一致するという保証はない。また本実験で用いた質問項目は，個々に無関係・独立したものではなく，10項目づつ集まって一つのクラスター即ち，パーソナリティの内容を形成している。従ってここでは，パーソナリティの内容別評価値が面接経験の増加に伴ない，どのように変化するかを検討した。その結果次の4つの典型的なタイプが認められた。

ⓐ いわゆる第一印象によって，後々まで制約を受けるタイプ (Fig. 14—B)。

ⓑ 面接経験の増加に伴ない，除々に評価が分化 (differentiate) していくタイプ (Fig. 14—D)。

ⓒ 面接経験が増加しても，評価がダイナミックに変動して，なかなか固まらないタイプ (Fig. 14—A)。

ⓓ 面接経験が増加しても，評価がなかなか分化しないタイプ (Fig. 14—C)。

従って，この事から，パーソナリティの評価が形成されるのには，いくつかのタイプがあり，一義的に第一印象によってのみ決定されるものではないという事が認められた。

4) 一般に，我々にとって，判断事態を多く経験すればする程一層，各人の判断基準が明確になり，それだけ自信をもって判断しやすくなると考えられる。しかし本実験では，面接経験が増加しても，自信値2で回答した項目数は，単調増加函数的に増えるものではなく，面接者Bを除き，約10〜20項目位のところで横這を示している。従って，判断に対する自信は，面接経験の増加に伴ない，それに応じて一義的に増加していくとはいえない。

5) 「自然な形で知合った人」と「実験Iの被評定者」の性格特徴に関す情報獲得過程は，かなり異なる。即ち，前者の場合，カテゴリーa：初対面の時から感じている性格特徴——に分類される質問項目が多いのに対して後者では少い。従ってこの結果から，「自然な形で知合った人」の性格特徴に関する情報獲得に際して，第一印象は，全く初対面のときに形成されたものというよりむしろ，初対面のときから数回の面接期間 (The span of first impression formation) に形成されたものではないかということが示唆された。

6) パーソナリティの内容によって，性格特徴に関する情報の獲得時期は異なる。また，「自然な形で知合った人」及び，「実験Iの被面接者」とも，カテゴリーC：最初からずっと感じていない性格特徴——に分類された質問項目が多いが，特に前者の場合，被験者にやや強制選択的に4つのカテゴリーに分類させたので頻数が多くなったものであり，「わからなかったら，分類しなくてもよい」と教示したならば，もっと少くなる[7]と考えられる。

7) 当初，Asch の言う "cold" と "warm" に対応する核になるようなものがあるのではないかと予測し，面接者に被面接者を一言で表現させたが，筆者の期待したような結果は本実験からは得られなかった。

註

1) パーソナリティの内容とは，佐野(1965)の言う「精神的分化 (D)」・「分裂性気質 (S)」・「躁鬱性気質 (Z)」・「顕動性気質 (E)」・「ヒステリー的傾向 (H)」・「神経質的傾向 (N)」と言うパーソナリティの6つの内容を指す。

2) パーソナリティの内容別評価値をベクトルで表現すると次のようになる。評定尺度値(1〜5) を「−2〜+2」に変換すると変換値 **A** は，

$$\mathbf{A}=(-2,\ -1,\ 0,\ +1,\ +2)$$

パーソナリティの内容「Z」の回答数を $\mathbf{N}^{(Z)}$ とするなら

$$\mathbf{N}^{(Z)}=(n_{-2}^{(Z)},\ n_{-1}^{(Z)},\ \cdots\cdots n_{2}^{(Z)})$$

故に「Z」の評価値 S_Z は

$$S_Z=\mathbf{A}\cdot\mathbf{N}^{(Z)}$$ （但し $\mathbf{A}\cdot\mathbf{N}^{(Z)}$ は内積） 同様にして，「H」……「D」の評価値 S_H……S_D は

$$S_H=\mathbf{A}\cdot\mathbf{N}^{(H)}$$
$$\vdots$$
$$S_D=\mathbf{A}\cdot\mathbf{N}^{(D)}$$

3) 本稿では面接者を大文字 A〜D，被面接者を小文字 r〜t と表記する。

4) 面接7で獲得された評価を最終評価とする。

5) 面接7のRは，全て1.00になるのでここでは考慮に入れないことにした。

6) カテゴリーeとは最初，感じていたものが途中で感じなくなり，最後にまた感じるようになった性格特徴。または，この逆になった性格特徴。

7) この事に関して，小谷津孝明助教授より有益な御助言をいただきました。

引 用 文 献

Asch, S. E. 1946 Forming impressions of personality, J. abnorm. soc. Psychol., 41, 258-290.

長田　雅喜 1966 対人認知
心理学評論 10, 85-102.

Newcomb, T. M. 1961 The Acquaintance Process New York: Holt Rinehart & Winston.

大橋　正夫 1960 最近の Person Perception の研究
心理学研究, 31, 243-259.

佐野　勝男 1965 性格の診断 大日本図書

笹尾　隆子 1969　他人の性格特性に関する人間の情報獲得過程　慶応義塾大学文学部卒業論文(未刊)
佐藤　一美 1973a　他者の性格特徴に関する人間の情報獲得過程　慶応義塾大学社会学研究科修士論文(未刊)
佐藤　一美 1973b　人間の情報獲得過程——他者の性格特徴に関して　日本心理学会第 37 回大会発表論文集, 706-707.
瀬谷　正敏・梶田　叡一 1971　社会的事象の認知　八木冕(監)　講座心理学第13巻,「社会心理学」11-33.
Tagiuri, R. & Petrullo, L. (Eds.) 1958　Person Perception and Interpersonal Behavior. Calif.: Stanford Univ. Press.
Taiguri, R. 1969　Person Perception. In Lindzey,G. & Aronson, E. (Eds.), The Handbook of Social Psychology, Vol. 3, 395-449.
詫摩　武俊(編) 1968　性格の理論　誠信書房
辰野　千寿 1966　改訂学習心理学　金子書房